

〈研究ノート〉

# 平安時代の出産と文学

Childbirth and literature in Heian period

片山 剛<sup>1</sup>

## 要旨

平安時代の出産はどのように行われていたのだろうか。また、それは文学作品にどのように描かれたのだろうか。王族、貴族の出産は単に私的な慶事というにとどまらず、次世代の権力構造を左右するものでもあった。本稿では、平安時代の医学書である『医心方』の伝える当時の出産の考え方を確認したうえで、『紫式部日記』『うつほ物語』『源氏物語』などの出産に関する記事を読んでいこうと思う。

キーワード：出産, 医心方, 紫式部日記, うつほ物語, 源氏物語

Childbirth, Ishinbo, Dairy of Lady Murasaki-shikibu, The tale of Utsuho,

The tale of Genji

## はじめに

出産はいつの時代も新しい命の誕生という大きな喜びをもたらすものでありながら、同時に産婦にとっては大変な苦痛を伴い、時として母子の命の危険にかかわる人生の大事業である。

出産する当人の不安や苦痛は言うまでもないが、周囲の人たちの心配もまた並大抵のことではない。就中、平安時代の貴族が娘を入内させて懐妊した場合、娘の健康や無事の出産を祈る気持ちだけでなく、出産がもたらす社会的意義や自己の権勢の浮沈に重大な関心を抱かざるを得なかった。生まれた子が男子であれば、次代の天皇となる可能性があり、それは皇位継承の安定と産婦の実家の権力の強化の意味を持ったからである。

出産は、現代に比べてはるかに切実に産婦の生命の危険と表裏をなしていたために、親をはじめとした周囲の人は精いっぱい努力を惜しまなかった。それでもやはり、村上天皇の中宮安子<sup>1)</sup>、一条天皇の皇后定子<sup>2)</sup>、藤原道綱室<sup>3)</sup>、小式部内侍<sup>4)</sup>などは出産のあと命を落としている。

産婦とその子を守るためには鳴弦、散米、甌落としのような魔よけのための習俗や加持祈祷、祓、卜占などに頼る面もあったが、その一方、経験による知恵や大陸から伝来した医学が重要な役割を果たしたことも忘れてはならない。

## 1 『医心方』の記述

丹波康頼が撰述して朝廷に献上した『医心方』<sup>5)</sup>三十巻は、古代中国から伝来した医書を項目ごとに編集したもので、わが国最初の医書として知られる。その内容は病気の原因や治療法はもとより、医学論、占相、養生、房中術、栄養など多岐にわたり、科学的な内容があれば俗信、まじないの類も見られる。古代中国の考え方だけに日本では実行できないこともあるだろうが、当時の医術の基本文献として重要な役割を持ったと思われる。

その中で、妊娠、出産に関する記述は巻二十二から二十五にかなり多く記されているので、いくらか目につく項目を挙げてみよう。

巻二十二<sup>6)</sup>には食事の禁忌、悪阻の治療、養生法、流産などについて書かれている。食事の禁忌としては、六畜の肉、猪(豚)の肝、兎の肉、鯉の膾などを挙げている。ただし、その理由としては、六畜の肉を食べると「令児不聰明」(児が聡明でなくなる)、兎の肉を食べると「令子唇欠」(子の唇が欠ける)、雀の肉を食べると「令児多所欲」(子が欲張りになる)など迷信に近いものが多いとみられる。あるいは、肉類を禁ずるために理由を後付けしたのであろうか。その一方、鶏卵や鯉の膾を食べると「使子多創」「令児多創」(子どもにできものが多くなる)というのは現代の感覚から言え

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2022年9月2日

ばアレルギーに関わるのかもしれない。また、一般的に妊婦はからだを冷やすのは良くないと言われるが、それに関して、「勿飲氷漿令胎不生」（氷漿を飲んではいならない。胎児が生まれない、つまり流産するからである）という記述がある。「氷漿」は氷を用いた甘い飲み物のようなものであろう。夏になると普通の人以上に暑苦しさを感じるであろう妊婦にとって誘惑的な嗜好品であったと思われるだけにタブーとして明確にしておく必要があったのだろう。

巻二十三は、出産に関するもっとも重要な産婦の心得、治療、処置、儀礼、吉凶などが記されている。

「産婦用意法」（産婦が注意すべきこと）には、以下のようなことが書かれている。

産婦雖是穢惡、然將痛之時、及未産已産、並不得令死喪家之人來、視之則生難、若已産者則傷兒<sup>7)</sup>

産婦は穢れているとはいっても、陣痛の時や出産の前後は服喪している家の人は来ないようにしなければならない。そういう人を見ると難産になる。すでに生まれていたら、その子を損なう、という。出産は穢れとされたが、死穢のある人が産婦の家に入ることも避けるべきだとされた。

欲産時、特忌多人瞻視、唯三人在傍侍生、惣訖了仍可告語諸人也、若人衆看之無不難耳<sup>8)</sup>

出産のときは多くの人に見られることを忌む。三人程度の人がそばにいて出産を待ち、すべてが終わってから諸人に告げるのがよい。もし多くの人が見ていると、難儀が生ずるだけだ、とする。

このほか、「出産後に母親を含めてあらゆる人は子の性別を問うてはならない」<sup>9)</sup>「産婦に悪露が続いているときはまだ清浄にはなっていないので、外に出てはならず、井戸や竈のところに行ったり、神祇や祠を拝してはならない」<sup>10)</sup>などの注意も記されている。

産婦にとって安産か難産かということはきわめて大きな意味を持つだろう。

任身垂七月常可服丹參膏、坐臥之間不覺忽生也、以温酒服如棗核日三<sup>11)</sup>

妊娠七か月からは、丹參膏<sup>12)</sup>を常用しなさい、立ち居の間に無意識のうちに生まれる、温かい酒で棗の種くらいを一日三回服用しなさい、ということで、丹參膏は安産の特効薬と考えられたようである。このほかに、「馬の鬣（たてがみ）を切って衣服の中にかけて人に知られないこと」<sup>13)</sup>「蛇の

抜け殻の完全なものを痛みのある時に絹の袋に入れて腰に巻くとよい」<sup>14)</sup>などの迷信の類の記述もある。蛇の抜け殻というのは、胎児がなめらかに生まれるまじないのようなものでもあろうか。

難産については

夫産難者、胞胎之時、諸禁不慎、或触犯神靈、飲食不節、愁思帶胸耶結齊下、陰陽失理並使難産也、賢母宜豫慎之<sup>15)</sup>

とあって、その原因を列挙している。さまざまな禁忌を慎まない、神靈を犯す、飲食の不節操、愁いを胸に持って邪悪なものを臍の下にためたり、男女和合の常軌を逸したりすると難産になるので、賢母はこれらを慎みなさい、としているのである。ほかにも、産婦の症状から難産や死産の診断をしたり、難産を避けるための呪文を記したり、さらには胡麻油、大麻の実、大豆、エンジュの実などの服用や「胎児の父の衣で井戸を覆えばよい」<sup>16)</sup>など、呪術的なことについても触れている。

巻二十四には、胎児の男女を知る方法や女の胎児を男にする方法などが記される。

脈左手沈実為男、右手浮大為女、左右俱沈実生二男、左右手俱浮大生二女<sup>17)</sup>

左手の脈が「沈（軽く指を触れても感じないが、強く圧すと感じる脈）」であれば男子、右手が「浮（軽く触れると感じ、強く圧すと弱くなる脈）」で大きければ女子、両手ともに「沈」なら男子の双生児、両手ともに「浮」で大きければ女子の双生児を産む、と診断するのである。このほか、妊婦を南向きに歩かせて元に戻らせるとき、左に回って戻ったら男子、右に回ったら女子、という迷信のような記述もある。こういうものは、たとえば女子がほしい場合に意図的に右回りに振り向かせるといようなまじないに用いられたかもしれない。

『産経』からの引用では、

任身婦人三月尺脉数也、左手尺脉偏大為男右手尺脉偏大為女、俱大有兩子任身脉左疾為男、右疾為女

というものがあつた。妊娠三か月の妊婦の尺脈で、左手が大きいと男、右手が大きいと女、両方とも大きいと双生児になる。また妊婦の左手の脈が速ければ男、右が速ければ女ともいうのである。

その他、男女の別を知る方法はさまざまに記されており、古来これが大きな関心事であつたことをうかがわせる。

女児を男児にする方法も記されている。たとえば「治婦人欲得轉女為男法」として

有身二月灸臍下三壯即有男<sup>18)</sup>

という記事がある。妊娠二か月の時にへその下に三壯（「壯」は灸の単位）すえると男子が生まれる、という。現代科学では子の性の決定は男性（父親）の精子がX染色体かY染色体かによって決まることが知られており、女性に原因はないが、そのことを暗示するような記事もある。

治但生女無男、此大夫病、非婦人過、馬子散方<sup>19)</sup>

つまり、女の子は生まれるが男が生まれないのは男性の病気で、女性には落ち度はない、馬齒散を処方する、というのである。馬齒散は馬の歯をつぶしたものとネナシカズラを混ぜたものという。ほかにも、「斧を妊婦の床の下に置け」「オスの鴨の羽の毛を二本、本人に知らせず妊婦の臥所の下に置け」などというものもある。

巻二十五は誕生後の子どもについての内容である。初乳の与え方、産湯の方法、臍の緒の切り方、乳母の選び方などが記された後、小児病についての記述が続く。

その中で、産湯についての記事を少し挙げてみる。

小児初生以虎頭骨漬湯中洗浴之令兒不病<sup>20)</sup>

虎の頭の骨を湯の中に漬けて洗い、湯浴みさせると小児は病気にならない、という。同じように、「牛脂を入れると年を取るまで病気にならない」「金銀、珍宝、珠玉を入れると尊貴な身分になる」などとある。そして、入浴させる日は、丑、寅、卯、申、酉の日、または甲寅、乙未、丙午、丁酉、癸酉、癸未、甲辰の日にすると無病長寿になる、という<sup>21)</sup>。

もうひとつ、臍の緒切りについて、こういう記事がある。

凡兒断臍法、以銅刀断之吉、臍當令長六七寸長則傷肌短則傷藏<sup>22)</sup>

臍の緒は銅の刀で長さは六七寸に切るのがよく、長すぎると肌を、短すぎると内臓を傷つける、というのである。また、臍の緒を切るタイミングについては「先浴之然後断臍裹之吉<sup>23)</sup>」とあり、湯浴みさせてから切って包むと吉である、とする。

懐妊してからも何かと大変なことが多いが、それでも子に恵まれるのはまだ幸せかもしれない。不妊に悩む人もいつの時代も少なくないからである。『医心方』は不妊の理由には三つあるとする。

婦人無子其事有三也、一者墳墓不嗣、二者夫婦年命相尅、三者夫病婦疾、皆使无子<sup>24)</sup>

先祖の墓守ろうとしないこと、夫婦の年周りが相尅すること、そして病疾がその理由だという。

前者二つは薬は効かないが、病気の場合には薬があるとす。また、女性が熱病になると風寒がからだに入り、それが子宮に入ると経血のめぐりが悪くなって子はできないという。

『医心方』の出産に関する記事をいくつか紹介してきたが、これらのことを念頭に置いて次に平安時代の日記や物語において描かれる出産の場面を読んでみたい。

## 2 敦成親王の誕生と『紫式部日記』

寛弘五年（1008）九月十一日、一条天皇第二皇子敦成親王（母は藤原道長女彰子）が誕生した。一条天皇にはすでに敦康親王（母は中宮定子）という第一皇子がいたが、彰子の産んだ子としては敦成が最初であった。すでに左大臣の地位に就いていた道長の権力から言って、次の春宮になるのは敦成である可能性が高い、というよりは道長が何としても敦成を春宮に、そして天皇に押し上げようとするはずで、この慶事は権力の行く末をも決定づけるものだった。その誕生のようすは道長の日記『御堂関白記』にも記録があるが、それは

午時、平安男子産給、候僧、陰陽師等賜禄、各有差、同時御乳付、切臍緒、造御湯殿具初、酉時、右少弁広業読書、孝経、朝夕同、従内賜御劔、左近中将頼定、賜禄依触穢人、御湯鳴弦五位十人、六位十人（寛弘五年九月十一日条）

という簡単なもので、この前後の日々もほとんど記事がない。道長のあわただしくも興奮した気持ちが筆を執る時間を与えなかったのかもしれない<sup>25)</sup>。

それに対して彰子女房であった紫式部の『紫式部日記』の記述は詳細なので、それによってその次第を追ってみる。

場所は道長邸の土御門第の寝殿である。

重陽の節句の翌日の九月十日、夜明けの頃に室内の調度を白で統一した。道長の子息や四位五位の者が作業するようすは実にあわただしい。修験者が物の怪を憑坐に移しては調伏する声も大きく騒々しい。陰陽師も集めて祈らせている。いよいよ出産間際となったあわただしいようすを周囲の人々の動きによって表現している。

中宮のいる寝殿の御帳台の周囲には憑坐とそれに取り憑いた物の怪を調伏する験者、重なるように座す高僧らが陣取り、北の障子と御帳台の間の狭いところには四十人余りもの人がひしめいてい

る。ものものしいばかりの情景である。

十一日の暁、北の障子を二間取り払って中宮は北の廂の間に移った。これは日遊神を避けるため<sup>26)</sup>と言われる。陰陽師の進言があったのかもしれない。御簾がかけられないので几帳を幾重にも立てている。この日も高僧のほか道長までもが仏を念じている。できる限りのことをする、という道長の気持ちがかえよう。このとき、道長が女房たちを移動させる記述がある。

人げ多くこみては、いとど御心地も苦しうおはしますらむとて、南、東面に出ださせたまうて、さるべきかぎりこの二間のもとにはさぶらふ。殿の上、讃岐の宰相の君、内蔵の命婦（下略）

あまりに女房が近くにいると中宮の気分も苦しくなれるというので、道長が南面、東面に人々を出させて、道長の妻倫子、讃岐の宰相の君、内蔵の命婦だけがこの二間のところに控えるのである。

話が飛ぶが、王制時代のフランスでは、王妃の出産に際して生まれる子が取り替えられたりしないように、いわば検分役として（実際は物見高いだけの者もいたかもしれないが）その場に多くの人が詰めかけたことが知られる。ルイ16世の王妃となったマリー・アントワネットの最初の出産について、カンパン夫人が残している記録を見ると、王妃を気絶させるほどの人たちが押し寄せたらしい<sup>27)</sup>。そういう例を知ると、ここでの道長の配慮は正しい判断によるものだったと言えるだろう。そして前述の『医心方』に「凡欲産時、特忌多人瞻視、唯三人在傍待生」とあったことも思い合わされよう。ここで中宮のそばに残ったのは『医心方』の言うとおり三人で、その顔触れは中宮の母の倫子、中宮の女房讃岐の宰相の君、そしてもう一人は中宮の弟教通の乳母である内蔵の命婦であった。ここに内蔵の命婦が加わっているのは、彼女が出産の技術に長けていたことが理由だと思われる。ずいぶん後のことになるが、道長の娘嬉子が万寿二年（1025）に出産した時も助産の役目を果たし「内蔵命婦、いづれの御前たちの御をりも、まづものの上手に仕うまつる」（『栄花物語』「みねの月」）と言われている。多くの人の出産に「ものの上手」、つまり取り上げの名人としてとして立ち会っているのである。

なかなか生まれないうため、中宮は形ばかり髪を削ぐ作法をして仏の加護を願うと無事男児を出産

した。後産が済むまでは僧俗ともになおも大声を上げて祈っている。天皇からは御佩刀が下賜されたが、その使者となった藏人头源頼定は出産の穢れに触れたために内裏に戻ると庭上で立ちながら（昇殿すると内裏も穢れるから）安産の報告をしている。

臍の緒を切ったのは倫子であった。『日本書紀』「神代下」に、木花開耶姫が子を産んだ時、「以竹刀截其児臍」とあって、「竹刀（あをひゑ）」で臍の緒を切っていることが知られる。一方、前述のように『医心方』には「凡児断臍法、以銅刀断之吉」と記されており、銅刀で切る方法もあったので、ここはどちらともわからない。平安時代末期の記録だが、中山忠親の『山槐記』治承二年（1178）十一月十二日条に安徳天皇誕生の記事がある。そこにも「或用銅刀、今度用竹也」と見え、この時は竹刀で切ったが、銅刀を用いることもあると記しているのである。

乳付けは橘三位、乳母も三人定められている。乳母<sup>28)</sup>に関しては、授乳する者、養育を主とするものなどが、（授乳可能な）タイミング、経験、知識、人柄、家柄などによって定められたようだが、医学的には健常であることが求められるくらいである。『医心方』の引く『小品方』は、「乳母の血気が乳汁となるので、その乳母の五情の善悪は血気が受け継いでしまう。しかし、ワキガ、ヒゼン、カイセン、難聴、めまいなどの病気がなければ児に飲ませてよいとしている。

湯殿の儀は酉の時。すでに誕生直後に湯で身体を浄めているはずで、これは儀式としての湯浴みである。湯を運び入れたのは中宮職の下級の者で、それを中宮の侍長らが御簾のそばに置く。若宮に湯をかける御湯殿には宰相の君、相手役にあたる御迎へ湯は大納言の君。道長が若宮を抱き、小少将の君が御佩刀を、宮の内侍が虎の頭を持って先導する。虎の頭については、前述の『医心方』にも「小児初生以虎頭骨漬湯中洗浴之令児不病」とあった。虎の持つ活力を新生児に与えようというのであろうか。御湯殿の儀に際しても道長の子息たちによって散米（うちまき）がおこなわれ、高欄のそばでは藤原広業による読書（とくしよ）があり、『史記』第一巻が読まれる。鳴弦も十人ずつ二列に並んだ五位、六位の者がおこなう。『紫式部日記』はこのあと産養（うぶやしなひ）についての記述が続く。

### 3 物語と出産

物語にも出産場面はしばしば描かれており、この出来事に対する人々の思いが浮かび上がってくる。また、出産が物語の主題や展開に関わることも少なくない。

多くの場面で安産か難産かということは大きな関心事であり、

いと平らかに男皇子生まれたまへり

(うつほ・国譲上)

いと平らかにをのこ子生みたまへれば

(落窪・巻二)

平らかに女にておはします

(夜の寝覚・巻二)

悩みわづらひたまふけしきもなく、ただ袖の内より生まれたまへるやうにて

(浜松中納言・巻一)

いたうも悩みたまはで女御子生みたてまつりたまへり

(狭衣・巻四)

いとやすく若君生まれたまへり

(とりかへばや・巻四)

のように、まるで枕詞のように安産であることを伝えている。特に『浜松中納言物語』の「袖の内より」云々という比喩は、いかに苦痛のない出産であったかをよく表現している。

また、「いといたく悩みたまへば(中略)からうじて男にて平らかに生まれたまへる、うれしさぞたぐひなき」(夜の寝覚・巻五)「かねてよりはればれしからずのみ悩みわたりたまひしを、いと平らかにをかしげなる女にて生まれたまひぬるを」(とりかへばや・巻二)のように、出産までの苦しみに対して安産であった場合にはその喜びや安堵がいっそう強調されるようである。

『うつほ物語』には出産に関する興味深い記事があるので、順に見て行こう。

「俊蔭」巻には二か所出産の場面があり、そのうちの二番目は俊蔭の娘の出産である。

六月六日、子生まるべくなりぬ。気色ばみて悩めば姫、肝心を惑はして「平らかに」と申しまどふほどに、ことに悩むこともなくて玉光り輝くをのこを生みつ。

俊蔭の娘は若小君(藤原兼雅)との一夜の逢瀬で子ができたことを自分自身ではよくわかっておらず、召使いの姫がそれと見破る。そして姫は「ただ御手をかいすまして神仏に『平らかに身々となしたまへ』と申したまへ」と勧めている。妊娠や

出産について無知な若い女性にとってこういう知識も経験も豊富な老女の存在は大きいものであろう。姫は出産のあとも若君を自分の着物の懐に抱いて、授乳の時以外は自らの力で養ったのである。

「吹上上」「あて宮」にも出産の記事はあるが、次に注目すべきは「蔵開上」であろう。仲忠は京極の旧邸の蔵で俊蔭(仲忠の祖父)の遺品を見つける。そこには「薬師書、陰陽師書、人相する書、孕み子生む人のこといひたる」などの文献類があった。中国伝来のものであろう。そんな折しも、仲忠の妻である女一の宮が懐妊する。すると仲忠は、かの蔵なる『産経』などいふ書ども取り出でて並べて、女御子にこそあれと思ほして、生まるる子、かたちよく、心よくなるといへるものをば参り、さらぬものもそれに従ひてしたまふ

と、『医心方』が盛んに引用する『産経』を取り出して調べ、生まれてくる子が女子だと判断する<sup>29)</sup>。そして美人で心のやさしい人になるような食べ物やそれ以外のものについても『産経』によって妻に与えているのである。『医心方』巻二十二に引く『産経』に

思欲食果瓜、激味酸菹瓜、無食辛而悪臭、是謂外像而内及故也

とあり、くだもの、瓜、刺激の強いもの、臭いのきついものなどを食べると子どもの外見やからだの内部に悪影響があるという。また、同じ巻二十二に引かれる『産経』では、妊娠九か月のときには甘酒を飲んだり甘いものを食べたりして帯を緩めて誕生を持つことで胎児の毛髪が豊かになるともいっており、特に生まれてくる子が女児であれば重要なことであろう。

また前述のように、『医心方』の引く『養生要集』には、「鯉の膾」「酒」「雀の肉」などについて子どもに悪影響を与えることが記されている。ただし、鯉は膾がいけないのであって、『医心方』所引『千金方』には鯉の鱗を除いて粳米を詰めて羹にしたものを食べると胎児が安定すると説き、鯉の肉は安胎の効果があるとも言っている。

いずれにしても、夫が必死になって文献を調べては妻に教えようとするのは、現代でもありそうなほほえましい光景であろう。なお、『産経』によって男女の別を調べたのであれば、前述のように尺脈の在り方を用いたのであろうか。

さて、この子が誕生すると、仲忠の母の尚侍が「見苦しの蝸牛(かたつぶり)」に喩えた臍の緒を切る。

そのようすは「生まれたまへる君をいと清く拭ひて、御臍の緒切りて、この袴に押しくくみてかき抱きたまふ」というものであった。まず新生児をきれいに拭ってから臍の緒を切っている。ただし、その刀が銅か竹かは記されていない。そして、子の父である仲忠の着けていた袴を脱がせて、それに包んで抱いたのである。乳付と湯殿はこのあとにおこなわれる。

「蔵開中」には、さま宮と涼の間の子の出産の場面がある。この時、さま宮はかなり苦しんだために、彼女の父の正頼が「典侍、かしこにもものせよ。心知らひたる人なくて悪しからむ」と言っ、お産の心得のある典侍を派遣するのである。『紫式部日記』などに見えた内蔵の命婦のような人物として頼ったのだろう。

「国譲上」では梨壺が春宮の皇子を生む。そのとき仲忠が「何ぞ」と尋ねる。「蔵開上」にもこれとよく似た「何ぞや、何ぞや」という言い方があるのだが、これは「男か、女か」の意味である。

「国譲中」には、あて宮が春宮の子をやすやすと産んだ後、仲忠の妻女一の宮の再度の出産の記事がある。仲忠はここでも妻に対して熱心に妊婦の心得を説いている。

仲忠が、「ものはきこしめしつや。何をか参るべき」と食事のようすを尋ねると、典侍が「物もきこしめさず。削り氷をなむ召す」と答える。何も食べずに削り氷(ひ)を召しあがったというのである。『枕草子』「あてなるもの」に「削り氷に甘葛入れて新しきかなまりに入れたる」とあるように、氷室から取り出した氷を削って甘味料を加えたものは夏の嗜好品として愛されたいらしい。それを食べたと聞いて仲忠は「あな恐ろしや。いみじく忌むものを」と咎める。女一の宮は食べたいものくらい食べさせてほしいと抵抗するが、仲忠が典薬頭に問うと、「過ごしたまひぬるときは暑く冷ややかなるものを驚きて御胸病ませたまふ。まだしきときはいとあつきものなり」という答えが返ってきた。冷たいものを食べ過ぎるとからだは過剰反応して胸の病になるし、少し食べたらかえって暑くなる、というのである。

『医心方』巻二十二所引『産経』に妊娠七か月になったら「無薄衣无洗浴無寒飲之」とあり、薄着、水浴のほか、冷たいものを飲むことを戒めている。また、前述した『医心方』所引『養生要集』にも「勿飲氷漿令胎不生」とあった。

「国譲下」は仲忠と女一の宮の第二子の出産前後

が描かれている。仲忠はなおも至れり尽くせりの配慮を見せる。出産が遅れると、不断の御修法を大規模におこない、孔雀経の誦経もさせる。そして斎戒沐浴をしたうえで、庭に出て「この人え免れたまふまじくは、おのれを殺したまへ。片時も遅らしたまふな」と伏しまろび、祈り続ける<sup>30)</sup>。女一宮の祖父正頼が「男は必ずかかる目を見る」(男児の場合こういう難産になるのだ)と慰めるが、仲忠はなおも泣く泣くせめて薬湯を飲んでくれと女一の宮に勧める。女一の宮が薬湯ひとすりと食べ物ひと口を飲み込んだ後、抱き起こすといよいよ出産の姿勢である。お産の心得のある人が抱きつくようにする。後述する絵巻物にも描かれているように、この時代は座産であり、前後から産婦を支える女性がいたのである。仲忠はその場を離れて魔よけのために自ら弓弦を鳴らして声を挙げる。さらに、加持に対しては「弱き人は、それに惑ひたまふものぞ」(弱っている人は大きな声に不安になるものだ)と大声を出すのを禁じている。この直後に正頼も「かかる折には人多くな候ひそ。騒がし」と言っており、前述の『紫式部日記』や『医心方』の記述と同じ考え方と言えそうである。このあたり、妻の出産をめぐる、精一杯の思いやりを見せつつ狼狽もする仲忠の性格がよく描写されているといえるだろう。そして「寅の時ばかりにいがいがと泣く」と、やっと産声上がる。産声を「いがいが」とするのは「(中宮安子が生んだ)御子、いがいがと泣く」(『栄花物語』「月の宴」)、「児ノ音ニテイガイガと哭ナリ」(『今昔物語集』巻二十七の四十三)にも見られる。筆者は未見だが、我室の『悉曇問答』には「ウガウガ」と記されているという<sup>31)</sup>。このオノマトベは清音で「いかいか」と読む説<sup>32)</sup>もある。『うつほ物語』「蔵開上」に、女一の宮の最初の子(いぬ宮)の五十日の祝いの場面がある。その際、仲忠の母が詠んだ

声かへずいかといふ子をいかでかは今日の名なりと人は聞きけむ

という歌に、泣き声の「いか」と「五十日(いか)」が掛けられている。このことが根拠になっているのである。しかし、たとえば『古今和歌集』物名で「うぐひす」を詠み込んだ藤原敏行の「心から花のしづくにそほしつづ憂くひずとのみ鳥の鳴くらむ」(「うくひず」と「うぐひす」を同じように扱っている)のように、清濁はあまり問題にしくてもよいかもしれない。

なお、今でも新潟県佐渡地方などで子どもが無

理を言ったり泣いたりするようすを「いがいが」というところがあり<sup>33)</sup>、長崎県地方では赤ん坊を「イガ」というところがあるという<sup>34)</sup>。

『夜の寝覚』は欠巻が多いこともあって、出産の記述も多くは残っていない。巻二で、主人公の中の君（のちの寝覚の上）は姉の夫の子を宿してしまい、その苦悩のために心身ともに疲弊、かろうじて石山寺に隠れて秘密のうちに出産する（生まれた女兒は石山の姫君と呼ばれる）。その場面は「平らかに女にておはします」とあるのみである。

巻五では、寝覚の上が男子を生む。このときは、「その御気色にいといたく悩みたまへば」とあって難産ではあるが、最終的には「からうじて男にて、平らかに生まれたまへる」とある。

『浜松中納言物語』巻一には、唐后と中納言の子が蜀山で生まれる場面があるが、ここでは「いささか例に変はり、悩みわづらひ給ふ気色もなく、ただ袖の内より生まれ給へるやうにて」という具合に、このうえない安産であったとされる。直接の関係はないだろうが、前述の『医心方』が、丹参膏を服用すれば無意識のうちに生まれると言っていたことも思い合わされる。

『狭衣物語』巻二には女二宮が狭衣大将の子を生む場面がある。狭衣はそもそも女二宮の婿候補だったが、その結婚を拒んでいた。しかし偶然女二宮の姿を見てその美しさに一夜を過ごしてしまう。女二宮の母大宮は娘の乳首が黒ずんでいるのを見て懐妊したことを知って、何者のしわざかわからないために苦悩して病の床に臥す。女房は女二宮の出産を隠すべく、大宮が出産すると内裏に伝えるが、生まれてきた子は狭衣そっくりの男子だったのである。大宮はこのとき四十五歳。かなりの高齢出産だったが、藤原道長の妻倫子が四十四歳で出産している事実もあり、ありえないことではなかつたらう。

『とりかへばや物語』は登場人物に性の倒錯があるだけに、出産は独特の意味を持つが、出産の場面そのものは取り立てて問題になることはない。

巻二では、権中納言（実は女性）の妻となった右大臣の四の君が宰相中将との間の子を生む。世間では権中納言との間の子だと思っており、権中納言の父である権大納言も、女性である我が子が父となるはずがないと不審に思いながらも「人目例ならず見せじと」、つまり不審に思っていることが世間に漏れないように腐心して、隙なく祈祷をおこなわせる。その結果、四の君は「いと平らか

にをかしげなる女にて生まれたまひぬる」と、無事出産する。

巻三には大将になっていたもとの権中納言（女性）が女性であることが知られて権中納言になっていた宰相中将の間に「思ふほどよりはいといたくほど経で、光るやうなる男君生まれたまへる」のである。

巻四では、女春宮が尚侍（男性。この時点では妹と入れ替わって大将になっている）の子を生む。そのときの出産は「かねて思ひつるよりもいたくも悩みたまはずいとうつくしげに、ただ大将の御顔なる若君生まれ出でたまへる」という安産だったという。さらにその大将と右大臣の四の君の間に「いとやすく若君生まれたまへり」とあって、こちらも安産である。巻四にはもう一度出産があって、それは尚侍（かつての大将で今は兄と入れ替わって尚侍になっている）が帝の子を生む場面で「おどろおどろしくも悩みたまはで、男宮生まれたまひぬ」とある。

このように、『とりかへばや物語』では男女の入れ替わりが興味を引くために、出産したこと自体が話題になるのであって、出産の状況は特異なものはないのである。

『栄花物語』は物語風の史書という見方ができるので上記のものと一緒ににはできないが、いくらか触れておこう。

さすがに長い年月を記す物語だけに出産の記事も少なくないが、ここでは万寿二年（1025）の出来事を取り上げてみたい。

この年は赤裳瘡（はしか）が流行し、それに罹った産婦は余計に苦しい思いをしなければならなかった。妊娠による抵抗力の低下があって罹りやすいうえに、重症化もしやすかったと思われる。

藤原道長の末娘、尚侍嬉子は春宮（敦良親王）妃となって、懐妊したものの、赤裳瘡に罹ってしまう。それは幸い軽快して瘡も乾いたようだが、からだが弱ったことは否定できないだろう。そんな折、藤原顕光、延子親子（ともに故人）の霊に苦しめられる。延子は小一条院女御であったが、その後道長が娘寛子（媿子）を小一条院に入れたため、親子は煮え湯を飲まされたまま亡くなったのである。顕光父娘は寛子に取り憑き、寛子が死去すると「今ぞ胸あく」（満足した）と言ったと伝えられる（『栄花物語』「みねの月」）。小一条院は、「女御（寛子）の御悩みのをり、堀河の大臣の『尚侍（嬉子）の殿の御産屋にかならず参りて見たてまつら

ん』とありしを、人知れず常に恐ろしく思し出でさせたまふ』(同)という苦しみを味わい、さらに「このわたり(小一条院自身)にはさやうにもおはしまさん、ことわりなり。この御をりかかれば、殿(道長)、いかに我をも心づきなく思すらん」と思い悩んでいる。自分に祟るのは仕方がないが、嬉子にまで危害が及ぶなら、道長が自分(小一条院)をどれほど不愉快に思うだろうか、と考えたのである。小一条院の難しい立場が描かれている。そして嬉子は万寿二年八月三日に皇子(親仁親王。後冷泉天皇)を生むが、わずか二日後、「三夜の産養」の日の湯殿の儀の終わったところに苦しみ出し、そのまま十九歳で薨去している。これについて『栄花物語』「楚王の夢」は「堀河の大臣、女御などの御霊すべてゆゆしきことどもをぞ言ひつづけのしりたまふ」とその執拗さを記しているのである。

なお、嬉子に顕光らの霊が取り憑いたことは『小右記』万寿二年八月八日条にも記されており、「一家尤有畏怖云々」と道長一家の恐怖に触れている。

出産と霊についてももうひとつ。藤原長家室(斉信女)もやはり万寿二年に懐妊し、赤裳瘡に罹ったうえ、物の怪に悩まされていた。そして八月二十七日に早産にもかかわらず大きな男子を産むのだが、死産であった。そして長家室自身もその二日後に亡くなっている(『栄花物語』「ころものたま」)。この出来事について『小右記』八月二十七日条は

新中納言妻大納言齊信女、為故左衛門督霊連  
日被取入不覚

と伝えている。新中納言長家(道長男)の妻が斉信の兄の故左衛門督誠信の霊に取り憑かれて意識がないというのである。長保三年に欠員のできた中納言に自分が昇進するつもりだった誠信は、道長に推挙された弟の斉信が先に任ぜられたことで道長や斉信を激しく恨んで悶死し、その意趣返しとして霊として出現したのである。

万寿二年という年は、赤裳瘡や霊の出現という、産婦にとって受難の年であった。

当時の常識として、出産の難しさには産婦本人の健康のほか、疫病とともに霊の存在が大きかったことが確認される。

#### 4 『源氏物語』の産

時代が前後するが、『源氏物語』の産について触れておこう。いくらかでも産のようすが描

かれるものには、明石の御方(滯標)、玉鬘(真木柱)、玉鬘の大君(竹河・二度)、宇治の中の君(宿木)もあるが、印象的で物語に大きな意味を持つものとしては、藤壺(紅葉賀)、葵の上(葵)、女三宮(若菜下、柏木)の産が挙げられよう。

「若紫」で光源氏と密通した藤壺は、我が身の懐妊を知り、それが誰の子であるかも理解してしまう。しかしほとんどの人は桐壺帝の子とっており、その場合、藤壺が病気で内裏を退出した三月以前の懐妊となり、年内には産するはずである。その時期が近づいて周りが準備を始めてもまるで兆候がなく、藤壺はおののかざるを得ない。それでも一月中に生まれれば「多少の遅れ」で済まされようが、その気配もなく二月になってしまう。そして「二月十余日のほどに男皇子生まれたまひぬれば」(紅葉賀)と、よりによって皇位継承の可能性の高い男子が生まれたのであった。十二か月での産という、一条天皇中宮定子(藤原道隆女)が脩子内親王を生んだ時、「懷孕十二ヶ月云々」(『日本紀略』長徳二年)という記録があるが、やはり異常なことであろう。

「葵」の産はあまりにも有名である。六条御息所の霊に苦しめられた葵の上は、母大宮が薬湯を持ってくると、抱き起されて、その直後に男子を産している。起こされて生むのはやはり産だからである。後産も苦しいものだったが無事に終わり、この産は「平らかにことなりはてぬれば」(葵)といわれた。それを聞いた六条御息所は「平らかにもはた(安産だなんて)」(葵)と感じた。産、しかも安産と聞いて、自らも前東宮の子を産んで産の苦しみを知っている六条御息所はあらためて敗北感を味わったのだろう。このあと秋の司召のために男性たちが参内すると「殿の内に入らぬにしめやかなるほどに、例の御胸せきあげていいたうまどひたまふ。内裏に御消息聞こえたまふほどもなく絶え入りたまひぬ」(葵)と、葵の上は突然亡くなってしまう。この部分について『岷江入楚』は「油断の程に物の気のと入りたる也」と言っている。物語の本文に「例の」とあるのは物の怪のための発作であることを意味し、作者は明確には言わずに六条御息所の怨念が葵の上をさらに苦しめたことを伝えている。

女三宮の産は、柏木との密通によって起こったのが大きな問題である。柏木は密通の場で少し居眠りをして、「夢に、この手馴らしし猫のいとらうたげにうち鳴きて来たるを」(若菜下)という、

不思議な夢を観たのである。女三宮が飼っていたのを春宮経由でもらい受けた、あの猫である。『細流抄』は「懐妊の事也」とし、『岷江入楚』は「夢獣は懐胎之相」と言っている。こういう言い伝えについてはほかの例を知らないが、この時点ですでに女三宮の懐妊が暗示されているのである。その後、光源氏に密通を知られた二人は、それぞれに光源氏からおとなげないほど皮肉のこもった叱責を受ける。そして女三宮は「夜一夜なやみ明かさせたまひて、日さし上がるほどに生まれたまひぬ」（柏木）と、ひと晩の苦しみを経て男子を生むのである。この出産の行き着く先は女三宮の出家であった。この突然の出家は、実は女三宮に取り憑いた物の怪の仕業で、その物の怪は「いとかしこう取返しつと、一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ、日ごろさぶらひつる」（柏木）と告げて去る。紫の上を取り殺すことはできなかったので、この人に憑いて出家させたのだというのであろう。六条御息所の死霊である。

『源氏物語』で印象的な出産は、いずれも出産がもたらす人々の苦悩や悲哀を描いたものであった。

## 5 絵巻物に見る出産

絵画史料は、文字をはるかにしのぐ雄弁さを持つことがある。例えば座産ひとつをとっても、実際はどのような姿勢でおこなわれたのかは文字ではわかりにくい。その点絵画であれば一目瞭然だからである。以下、かなり粗いものだが、筆者が模写したものを用いながら述べていく。

承久本『北野天神縁起絵巻』（北野天満宮蔵）に見える出産の場面は、日藏上人の六道めぐりのうちの「人間界」の部分にある。画面左奥が産婦とその世話をする女性たち、簾の手前には鳴弦をす



北野天神縁起絵巻

る男がいて、さらに庭前には陰陽師の姿が見える。産婦の姿を拡大したのを見ると、向こう側にいる女性にしがみついており、柱の陰に見える人物が子を取り上げるのであろう。



北野天神縁起絵巻（拡大）

『餓鬼草紙』（河本家旧蔵。東京国立博物館蔵）にはまさに出産直後の絵が見られる。画面中央に敷物を置いて産褥とし、白い装束の産婦と新生児が描かれる。同じく白装束の三人の女性が取り囲みさらに尼姿の人物、左側には直接出産の世話をしたわけではなさそうな女性が二人いる。魔よけのために、手前にある桶に入れられた米を撒いたり、甑（土器）を割ったりする役割があったのだろうか。割れた甑と見られるものが手前に散乱している。右端には僧侶と憑坐がいて、出産が終わったことを告げに来た女性が顔をのぞかせている。憑坐は上半身裸で、憑依のためはかなり憔悴しているようだ。この姿は東京国立博物館蔵『弘安本北野天神絵巻』乙巻や防府天満宮蔵『松崎天神縁起絵巻』巻四の狂女<sup>35)</sup>の姿と同じである。画面の両端には出産の場には立ち入れない男性の姿。どちらかが新生児の父親であろうか。そして「主人公」の餓鬼は今まさに新生児に襲いかかろうとしている。この餓鬼は「食小兒餓鬼」「伺嬰兒便餓鬼」と言われるもので、周りの人間には見えない存在である。産婦の部分拡大すると、開いた足の間から文字どおり子を「生み落としている」ようすがうかがえる。新生児は両手を上げていて健康そうである。産婦も、周りの女性たちも明るい笑顔を見せており、それだけに餓鬼の魔の手がいつそう不気味に感じられよう。当時は座産であったが、その姿がきわめて明確に描かれている。

『彦火々出見尊絵巻』（明通寺蔵）は模本という事情もあって、画面はきわめて美しい。火遠理命（彦火々出見尊）が兄の火照命の釣り針をなくしてし



餓鬼草紙



彦火々出見尊絵巻



餓鬼草紙 (拡大)

まい、龍王の助けでそれを見つけたうえ、龍王の姫君（豊玉姫）と結婚することになる。そして姫君が出産するのがこの場面なのである。詞書によると、新たに作った産所の屋根に鶴の羽を葺きつつあったが、それが終わらないうちに生まれたので生まれた子は「うのはふきあへずのみこと」と名付けられたとする。この出産は難産だったようで、詞書に「こはらをきりにきりて（小腹を切りに切りて）」とあるように、下腹部を切って出産したようである。板敷の上に敷物を敷いて産褥とし、姫君は柱にしがみつき、膝をついてお尻を突き出すようにして出産する。背後の女性が右膝を立てて姫君を支えながら子が生まれるのを注視している。奥の老女が無事を祈り、手前の女性は足を高々と上げて甑を踏み割ろうとしている。掲示した画面には見えないが、産所の外では龍王宮の陰陽師にあたる人物が祓や占いをしている。

甑（土器）を割ることについては『徒然草』61段に

御産のとき甑落とすことは、さだまれることにはあらず。御胞衣（えな）とどこほるときのまじなひなり。とどこほらせたまはねば、このことなし。下ざまより事おこりて、させ

る本説なし。大原の里の甑を召すなり。古き宝蔵の絵に、賤しき人の子うみたるところに、甑落としたるを書きたり。

と見え、民間から起こった風習で、それが貴族社会に広がったという。大原（腹）の甑（腰き）という言葉の連想があるらしい。胞衣が滞っている場合のみおこなうとしているが、『餓鬼草紙』や『彦火々出見尊絵巻』にそれが当てはまるなら、『餓鬼草紙』は出産直後、『彦火々出見尊絵巻』は直前なのでいずれも後産に至る前、つまり甑を割るべきタイミングになっていないと思われ、異時同図の可能性もある。宮中では甑を屋根から落として、南に落とせば男子、北に落とせば女子であることを示すとされたのに、安徳天皇の時は北側に落としたというのは『平家物語』「公卿揃」に見られる有名な話である。

ずいぶん後の時代だが、『女芸文三才図会』（明和八年1771）に屋根から甑を落とす絵があり、そこには「はやくあとさんのをりるやうにとくとくとおとませう」と記されている。

## 5 まとめ

平安時代の出産についての当時の人の考え方や風俗習慣などについて、医書、物語、絵巻物を中心に読み解いてきた。貴族社会では子を生むことは家の浮沈にかかわる問題であった。藤原道長が複数の妻を持つのを嫌がった息子の頼通に「男は、妻はひとりのみやは持たる」（『栄花物語』「たまのむらぎく」）と一喝したのも、彼らにとって跡継ぎの男子や入内させる女子を持つことがいかに重要だったかを示すものである。

また、物語の中でも、出産がひとつの事件となることで、登場人物の複雑な心理や思わくを浮き彫りにし、ドラマティックな話の展開を促す重要

な役割を持つ場合が多かった。そして、『医心方』を参看することで見えてくるものもあったように思う。

文献、注

- 1) 「(応和四年) 四月廿九日甲戌、中宮藤原安子崩于主殿寮【年三十八 皇太子母也】産出之後有此事」(『日本紀略』)
- 2) (長保二年十二月)「今は後のこと(後産)になりぬ。(中略)帥殿御顔を見たてまつりたまふに、むげになき御けしきなり。あさましくてかいさぐりたてまつりたまへば、やがて冷えさせたまひにけり」(『栄花物語』「とりべ野」)
- 4) (万寿二年十一月)「滋野井の頭中将(藤原公成)の子生みて失せにけり」(『栄花物語』「ころものたま」)
- 5) 「永観二年十一月廿八日撰此書進公家」(『医心方』跋)。本文の引用は槇佐知子『医心方』筑摩書房1998によるが、字体や読点の位置などを改める場合がある。
- 6) 以下に紹介する巻二十二の内容はすべて『養生要集』を引用したものである。
- 7) 『千金方』による。
- 8) 『千金方』による。
- 9) 『千金方』による。
- 10) 『小品方』による。
- 11) 『産経』による。
- 12) 赤参とも。現代でも婦人病に効能のある薬として製造されている。
- 13) 『葛氏方』による。
- 14) 『小品方』による。
- 15) 『産経』による。
- 16) 『小品方』による。
- 17) 『病源論』による。
- 18) 『枕中方』による。
- 19) 『録驗方』による。
- 20) 『産経』による。
- 21) 沐浴の吉凶については『九条右丞相遺誡』(日本思想大系8『古代政治社会思想』岩波書店1979による)が『黄帝伝』を引いて「毎月一日沐浴短命、八日沐浴命長、十一日目明、十八日逢盜賊、午日失愛敬、亥日見恥云々」と言っている。長和二年七月六日誕生の禎子内親王の七日の沐浴について『帝王編年記』(『新訂増補国史大系』第十二巻 吉川弘文館1965による)は、七日の湯殿については直しからずとして、「陰陽師吉平勘申八日、左大臣道長被仰云、世俗此日不浴如何、吉平申云、無所見、七月八日沐浴之由見于尚書曆、仍有御浴殿事」と記しており、湯殿儀に関しても吉凶は強く意識されていたことが分かる。
- 22) 『産経』による。
- 23) 『産経』による。
- 24) 『病源論』による。
- 25) 『権記』も記事は多くなく「已剋参左府、馬剋中宮誕男皇子、仏法之靈驗也、御乳付橘三位、読書伊勢守致時朝臣、右少弁広業、拳周朝臣等也云々」という程度である。
- 26) 山本利達『紫式部日記』p19新潮日本古典集成。1980
- 27) Jeanne-Louise-Henriette Campan “Mémoires sur la vie Privée de Marie-Antoinette” Baudoin frères, 1826  
David WignerによるeBookの英語版 (<https://www.gutenberg.org/files/3891/3891-h/3891-h.htm>) には、  
The accoucheur said aloud “La Reine va s'accoucher,” the persons who poured into the chamber were so numerous that the rush nearly destroyed the Queen.  
と記されている。また、シュテファン・ツヴァイクによる伝記『マリー・アントワネット』(角川文庫。2007 中野京子訳)は  
いよいよ王妃の出産が始まったと、宮廷侍医が大声で告げた数分後、貴族の一団がどかどか入ってきて、狭い部屋は見物人たちでひしめき(中略)王妃の頭に突然、血がのぼったのだ。重苦しい空気と、そしておそらくは物見高い五十人の見物人を前に苦痛をこらえるストレスで、窒息しかけていたのだろう。  
と伝えている。
- 28) 乳母については次の研究が参考になる。吉海直人『平安朝の乳母達—『源氏物語』への階梯』世界思想社1995
- 29) 『医心方』巻二十四の引く『産経』には必ず男子が生まれる方法も6条書かれているが、仲忠はそれは用いていないことになる。
- 30) 庭に出て祈願する姿は『伴大納言絵巻』で、源信が無実の罪が晴れるように祈る場面に描かれている。

- 31) 馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一『今昔物語集④』  
(新編日本古典文学全集) p136-137頭注。小学館2002
- 32) 中野幸一『うつは物語③』(新編日本古典文学全集) p379。小学館2002
- 33) 『日本国語大辞典 第二版』小学館2003
- 34) 藤原与一『日本方言辞書』上巻p408-409。東京堂出版1996 用例としては「イガバモイセンカ」(赤ちゃんをお守りしなさい)などを挙げている。
- 35) 阿闍梨仁俊を恋慕して狂女となった鳥羽院女房である。